

躍 進

C★NOVELS大賞作家アンソロジー

九条菜月

夏目 翠

葦原 青

あやめゆう

尾白未果

岡野めぐみ

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の29頁分を収録したものです。

ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

占師と盗賊 華国神記

九条菜月

イラスト▶由貴海里

6



警邏ニダスの目を逸らしたい現実 受難の三兄弟

岡野めぐみ

イラスト▶高山しのぶ

32



sprout もがもが mgmg !

葦原 青

イラスト▶さくらねこ

58



いつかの情景 ブレイブレイド

あやめゆう

イラスト▶しばの番茶

84



じん かい な 燼灰を薙ぐおろか者 災獣たちの楽土

尾白未果

イラスト▶深遊

110



曙光の円舞曲 ヴィレンドルフ恋異聞

夏目 翠

イラスト▶坏よしや

140



COMMENTS

166



ごあいさつ

新しい書き手と出会いたい——新人応募の賞として、C★NOVELS大賞を設立し、すでに八回、十七人のC★NOVELS作家を送り出すことができました。読者のみなさんの応援のおかげと深く感謝いたしております。

さて、感謝の気持ちをこめて、大賞作家のアンソロジーを企画しました。新星たちそれぞれのシリーズの書き下ろし外伝競演を、どうぞお楽しみ下さい。

現代物があれば正統派ファンタジーもあり、ヨーロッパ風舞台の物語があればアジアな雰囲気のものもあり……バラエティ豊かな二冊となりました。まずは、第一弾『躍進』をお届けします。お気に入りの作家の作品はありますか。また、初めて読んで好きになった、そんな出会いになれば嬉しいです。

C★NOVELSではこれからも、心躍るような、面白い作品を刊行してまいります。

今後ともなおいっそうのご愛読をいただけますよう、心よりお願い申し上げます。

C★NOVELS編集部一同



躍進

C★NOVELS大賞作家アンソロジー



占師と盗賊 華国神記

九条菜月 イラスト／由貴海里

正午を知らせる鐘が鳴ったのをきっかけに腰をあげた禁軍の將軍と入れ替わるように、龍乎の二人が鄭家へと姿を見せた。將軍は肉饅頭を手土産に持つて来たが、こちらは手ぶらよりも質が悪い、厄介事を持ち込んで来た。

「だから、困になるだけだつて。誰も別に、劍を取れとは言つてねえだろうが！」

鄭家の客間に、空氣が振動するほどの怒声が響き渡る。興味本位で同席していた李春蘭は、思わず小さな手で耳を塞いだ。

客間の中央にある円卓には、四つの椅子が置かれている。春蘭の右手に座り大声を張りあげているのは、龍乎虎慈軍隊長、姫子慮だ。

龍乎とは、街を守る部隊である。十二の隊が存在し、それぞれ割り振られた地域の治安維持を行う。街の巡回や、犯罪を取り締まるのが主な仕事だ。

子慮は二十代半ばの青年で、精悍な顔立ちに、きつめの目元が我の強そうな印象を与えている。巡回中に立ち寄ったためか、短服の上から、背甲と胸甲を肩の部分で結ぶ形の鎧甲という防具に、腕を防御するための披膊と、足を防御するための膝裙を身につけていた。

さすがに腰に帯びた劍は外しているが、なにが起きても即座に対応できるよう、卓に立て掛けてあつた。

「いちいち怒鳴らないでください。というか、隊長は黙っていてくださいと言つてるでしょうが！進む話も進みませんよ！」

その隣で、同じように声を張り上げたのは、子慮の副官、杜文重だ。

歳は子慮よりも若く、中肉中背の、取り立てて特徴のない顔立ちだが、身のこなしは武術を嗜むだけに一切の隙もない。

文重は鋭い眼差しで子慮を睨みつけ、自分から見

て右側——つまり、春蘭の左側に座る鄭仲望へと真面目な顔を向けた。

「むろん、ただとは言いません。ちゃんと謝礼も出ます」

「……あのさ、金を払うと言えはなんでもかんでもうなずくと思ってる？」

気怠げに溜息をついた鄭家の主は、白湯を口に含んだ。

容貌は整っているが、全身に漂う倦怠感のせいで締まりのない印象が強い人物だ。着用している淡緑色の袍も草臥れている。長く伸びた前髪で顔の右半分が隠れ、髪は巾で結い上げず、無造作に束ね背中に流しているだけだった。子慮とそう歳も変わらないのだが、妙に老成した印象を受ける。

そんな三人に囲まれた形で卓についていた春蘭は、口出しすることなく、頭上で交される会話に耳を傾けていた。

大人三人に、どう見ても十歳前後にしは見えない

春蘭が同席している図は、端から見れば違和感を覚えるだろう。だが、春蘭の性格に慣れてしまった三人は、子供が聞く話ではないから、と退出を促すことはなかった。

「なに言ってるんですか。報酬は大事ですよ。やる気も違ってますし。それとも、善意で協力していただけるんですか？」

「それよりも前に、面倒事に巻き込まれるのはごめんなんだけどね……」

億劫げに肩を竦めて見せた仲望に、文重も苦い顔で応じた。

「むりを言ってる自覚があります。でも、こっちにも事情があるんですよ。よりによって、禁軍に盗賊団討伐の勅命が下つてしましまして。攫猿の件でも禁軍が出張ったじゃないですか。それから、まだ日も経っていないのに、再び手柄を奪われるだなんて龍乎の面目丸潰れもいいところだ——と、お偉方がうるさくて、うるさくて」

攫猿とは、妖あやかしの一種である。猿に似た外見で、背丈は成人男性の倍ほど。縄張りを持ち、繁殖のために人里から婦女子を攫さらう。

普段は、山界さんかいと呼ばれる人里離れた山奥に棲み、滅多なことでは姿を見せないのだが、その攫猿はなぜか華安かあんの都に姿を現した。そして、貴族や豪商の屋敷を襲つては、年頃の娘を次々に殺害するという事件を起こしたのである。

当然、龍乎は攫猿退治に奔走ほんそうした。しかし、相手は妖の中でも、凶暴なうえに知能が高く、どうしても退治できなかった。事態を不安視した寵妃ちようきの哀願により、皇帝の直属の軍である禁軍に勅命が下ったのである。

その甲斐かいあつて攫猿の件は解決したのだが、入れ替わるように、今度は盜賊団が華安を騒がせはじめた。文重の説明によれば、すでに犯行は四件に及び、犠牲者も多数出ているのだという。盜賊団の話は、市井しせいの噂うわさとして春蘭の耳にも入っていた。

犯行の手口は決まっており、狙われたのはどれも警備にあまり金をかけていない、やや裕福な官吏の屋敷ばかりだった。

事前の下見を行った様子はなく、嵐のように押入って金目のものを手当たり次第に奪い、逃走するという。警備が厳重な屋敷に押し入るより、実入りが落ちても手間が少なく確実に、安全な方を選んだのだろう。

龍乎も深夜の巡回を強化してはいるが、中堅の官吏の数は膨大ぼうだいだ。犯行範囲も広い。網の目をかい潜くぐるようにして、犯行は重ねられていた。

「仲望さんほど好条件な官吏はいないんです。どんなにお願いしても、囹らうと聞くなり、顔を真っ青にして断られてしまつて。謝礼を出すと言つても、金より命が大事だと言つてね」

仲望さんが頼みの綱なんです、と文重は涙ながらに頭を下げる。その隣では、子慮が不機嫌な顔で、「官吏つてのは、意気地のない奴らばかりだ



警邏ニダスの目を逸らしたい現実 受難の三兄弟
岡野めぐみ イラスト／高山しのぶ



温暖な気候を作り出す大洋に囲まれた中央大陸。

その南に位置するマラキア王国は、古の都市国家マレ・カエルムの大廃墟を始めとした神の遺産、そして、その神の名を冠したカエルレウス教団の聖地を擁する中央大陸一の大国。

——己が生まれ育ち、今も住み続ける場所を、鳥瞰図のような視野を以て自覚するのは、異国より来て聖地を目指す巡礼者の旅を護り助ける時くらい。

「まこと美しい国ですね、マラキアは。空の色がとてもきれい」

マラキア王国地方警備隊ユウラス警邏担当ニダスは、物珍しげに辺りを見回しながら広葉樹の森に半ば埋もれかけた旧街道をゆったりとした足取りで進む、老境に差しかかった女の言葉に誘われるようにふと見上げる。

木々の隙間から見える、雨季にはまだ少し遠い空は、生まれてこの方マラキアの外に出たことのないニダスからすれば代わり映えのしない澄んだ薄青。こういう日は実のところ山賊日和だったのだがな、と、深い森のなかに気を配りつつ胸の奥でぼやく。先日亡くなった母を弔う為に北大陸から遙々やってきてマラキアの風土の豊かさや美しさに魅せられたという巡礼者には到底聞かせられないが、ニダスが配属された寒村ユウラスのあるマラキア南西部、一般的にナタリス周辺域と呼ばれる一帯は、国内でも有数の山賊出没区域だった。

都市からは離れ、寒村がいくつか集まっただけの田舎。街道の先にあるのは余程熱心な信徒しか訪れない廃墟に囲まれた聖地のみ。それ故、村間に馬車を走らせるだけの予算もつかず、地方警備隊の警邏が、元来の仕事である夜間警備及び昼間警備と住人による自衛の指導に加えて、こうして往来の護衛をも担ってきた。

聖地周辺は特殊な魔法で守られており、山賊といえども近寄らないが、そこに至るまでの道中というのは、或る程度の路銀を所持した巡礼者を襲うのは格好の場所。選りすぐられた警邏とはいえ、山賊相手となると多勢に無勢。護衛の最中に命を落とした者も少なくなかった——が、しかし、ここ数年その被害はめっきり少なくなり、むしろ山賊の検挙率が目に見えて上昇している。

ニダスが配属されたばかりの頃は、森のなかの気配を探れば必ず不穏な殺気が感じられたものだが、最近ではほとんどなく、今だって何も感じられない。「厳しい巡礼の旅になるかと思っておりましたが、マラキアの大地と人々に癒やされるうち、聖地まであと少しのところまで来ることが出来まして、これもカエルレウスのご加護でしょうか。有り難いことです」

「……そうでしょうね」
気取られない程度の逡巡ののちに頷いたニダス

は、やはり胸の奥でばやく——ここ一帯の治安がよくなった直接の原因は多分カエルレウスと全然関係ないところにあるけれどもな、と。

マラキア王国に生まれた者の常として、ニダスはカエルレウス教団の信徒であるものの、だからといって神の奇蹟を信じて追い求め、社会的な現実から目を逸らすようなことはしない。

——逸らしたいと思うことは多々あれど。

今日も結局山賊は現れず、無事に勤務地ユウラスから隣村ナタリスの教会に巡礼者を送り届けたニダスは、その足でナタリス周辺域を統括する警邏長の居宅兼詰所に任務完了の報告に赴く。

地域住民の村間移動の護衛とは異なり、巡礼の旅のそれというのは教団の意向もあり報告手続きが非常に煩雑になっている。その問題の提出書類の様式を思い浮かべながら列記すべき内容をまとめつつ、

ほとんど無意識のうちに呼び鈴を鳴らし、はい、と返事が返ってくるのを聞くと同時に扉を開け——微かに温もった空気の甘酸っぱく、それでいて香ばしい匂いに、挨拶も忘れて思わず立ち尽くした。

「誰……あ、ニダスくんだ」

炊事場からひよこつと怪訝な顔を覗かせ、そして、目が合うなりおっとり微笑んだのは、ナタリス警邏長マイルス・フィグラ。

「こんにちは。いらつしやい」

上役ではあるものの、ニダスの二つだけ歳上。

「こ、こんにちは……ではなく！先輩！ご報告に伺いました！」

詰所に充満した食欲をそそる香りと人懐っこい笑顔に氣を取られて思わず普通に挨拶をしかけ、慌てて敬礼するニダスに、ご苦労様です、と笑顔のまま応えた彼は、堅苦しい警邏長の制服をきっちり着込んだ上に花柄の前掛けをかつちりつけているという何とも言い難い出で立ちで。

「……お取り込み中でしたか」

おずおずとそう訊ねたニダスに、うん、と至極当然という風に頷いた。

「今朝ね、ご近所さんから採れたてのお野菜と、あつと、魚の切り身をいただいたんだ。一昨日木苺摘んでソース作ったところだったからさ、今日のお昼は野菜と白身魚のパイにしようと思って」

空腹にあまり優しくない香りの原因はわかったが、

「その、マイルス先輩が、お作りに？」

「もちろん。こんな格好しておきながら、他の人に作らせるって選択肢、僕にはないなあ」

と、花柄の前掛けの裾を摘まんでひらひらさせつつ苦く笑うその人は、王宮騎士団長を母に、大貴族の子息を父に持ち、いずれ地方警備隊の幹部になるだろうと目される警邏長。

「……人、雇わないのですか」

警邏ならともかく、警邏長となれば使用人を置くのが普通。まして、出自が裕福だと警邏の時から使



sprout mgmg! ももが

葦原青 イラスト／さくらねこ

「あの……す、好きです……っ。っ、つきあつてくださいっ！」

潤うるんだ目。上気した頬ほ。そして、まるで俺を逃がすまいとするかのように足に絡からみつく草の蔓つる。まったくわけがわからない。

いつもの学園。いつもの生活。いつも通り部活で受けた依頼をこなすために、俺はこの人気ひとけのない校舎裏にやって来たはずだ。

それなのに、何がどうしてこうなった？
何故俺はいま、告白されている？

……しかも、同級生の男子にっ！



《魔法使い》と呼ばれる者たちがいる。

有り得ぬはずのものを識しり
成し得ぬはずのことを成す

そんな、不思議な力を持った少年少女。

彼らは、大人になつて魔法の力が消滅するまでの限られた時間を、魔法能力開発大学校と呼ばれる施設で過ごす。

ここ、鹿角かづの学園もそのひとつだ。

某県某市の山奥に位置し、高さ二百メートルを誇る大風車が一際目立つ。

俺、遠野春親とのおのはるちかがここへやって来たのは今年の春。
入学当初、俺は腐くさっていた。

本来の志望校での新生活に希望を抱いていた俺にとつて、鹿角への入学が不本意極まるものだったためである。

高校受験の失敗、人生の蹉さく跌とつというところだが、要するに受験戦争の渦かちまわ中でいろいろと余裕のない時期に、魔法使いとしての適性が「発見」され

た——「発覚した」と言い替えてもいい——ことが原因だった。

あの頃の我が身を思い返すだに恥ずかしくて死にたくなるので詳しい内容は伏せるが、なんだかんだあって俺はこの場所で暮らしていく決意を固め、その過程で、とあるクラブに身を置くことになった。

その名も——

くじら部

という。

表向き、我が部は生徒の抱えるトラブルを解決するなんでも屋的部活動だと認識されている。

ただし、依頼を先遂^{かんすい}するという部分には重点を置いていたとはいいい難^{がた}く、やってくるのは冷やかしか解決すればラッキーというようなポジティブな思考の持ち主、あるいはそれこそ藁^{わら}にでも縋^{すが}りたいほどに追い詰められた人間ばかりだったりする。

そんなわけで、ふだんそちらの活動のほうはあまり忙しくないのだが……

「先輩。七尾先輩」

「んー？」

俺の呼びかけに、行儀悪くテールブル上に足を投げ出しながら雑誌を読んでいた少女が顔を上げた。

光を透かして輝く金髪に、人形のように整った顔立ち。ただし、尊大な表情が作り物めいた印象を打ち消している。

胸許にジェットをあしらったブローチ。口の横には、さっきまでパクついていたクッキーのかすがついている。

彼女が、このくじら部の創設者にして部長でもある七尾竜希^{たつき}先輩だ。

「そろそろ時間じゃないんですか？」

「何の？」

「だから、今日は依頼人がくる日でしょう」

「お前は本当に、興味^{きょうみ}のないことはすぐ忘れるな」

呆れたように肩を竦めたのは、中性的な美貌のパンク少女、副部長の青嶋涼子先輩だった。

そんな俺たちを、カーテンで仕切った奥のスペースから眺めているスモック姿の少女が倉橋杏。あどけない表情と仕草はまるで小動物のようで、よく小學生に間違われたりするが、それでも中等部の三年生である。

「そーいやそうだったか」

七尾先輩は椅子に座りなおし、うーん、と両腕を突き上げのびをした。

と、そこで、部室入口のドアが大きな音をたててひらいた。ひっ、杏ちゃんが小さく叫び、慌ててカーテンを閉めて奥の間に引っ込む。

「来たな」

青嶋先輩が七尾先輩の右隣の席へと移動する。俺もすでに慣れたもので、彼女に続いて席に着き、メモ用紙とペンを準備した。

「な、なんだこの部屋……」

入口から一步入った場所で絶句しているのは、軽薄な印象の男子生徒だった。

金髪にピアス。我がくじら部にも同様の特徴を持った人物が在籍しているが、彼の場合は、いっちゃ悪いが粗野で品のない感じがした。

彼の戸惑いも無理からぬことである。この部室に始めて入った人間は、だいたいこんな反応をする。一言でいえば、カオスな中身のおもちゃ箱。

たとえばパプアニューギニアあたりの土産物屋で売っていきそうな仮面の数々。

たとえばいかにも年代物といったふうを装っているが、よく見るとパチモン臭い壺。

たとえば木彫りのメリーゴーラウンド。

たとえば黒光りする金属でできた謎のキューブ。

壁に、床に、天井に——それこそありとあらゆる場所に、そんな用途不明、統一性皆無の品々が雑然と設置、安置、あるいは放置されている。

部室中央には依頼人との面談用にテーブルと椅子



いつかの情景 ブレイブレイド

あやめゆう イラスト／しばの番茶

X

ヨルク・メルカが『英雄の息子』と初めて話をしたのは、サーデイン聖^{せい}央^{おう}学院に入^せ学^{がく}してから三箇^{かげつ}月も後のことだった。お互^{たが}い同じ神聖^{しんせい}術^{じゆつ}学^{がく}科^かを専攻^{せんこう}していたし、何しろ『英雄の息子』として有名^{ゆうめい}だったから顔^{かほ}くらいは知^しつていたけれど、それまで特に話^わす機^き会^{かい}もない相^あ手^てだったのだ。

「悪いけど、ちよつといいか？ おまえ、確^{たしか}か同じ学^{がく}科^かのやつだよな？」

と、声^{こゑ}を掛^かけられたのは学院の大図^ず書^{しょ}館^{かん}、長机^{ちやうき}の端^はで古^{ふる}い文^{ぶん}献^{けん}を讀^よんでいたときだ。

「えーつと……そういうそちらは、『英雄の息子』さん、ですね？ ジン・アークロストさん」

「あー……まあ、そうだ。覺^さえやすいもんな。あんまり買^かい被^{かぶ}らないで欲^ほしいんだけど」

ヨルクの言葉に輕^{かろ}く眉^{まゆ}を寄^よせ、英雄^{ゆうゆう}の息^{いき}子^こはややうんざりしたふうに嘆^{なげ}息^{いき}を吐^ついた。

「それで、その買^かい被^{かぶ}らないで欲^ほしいアークロストさんは、何^{なん}の用^{よう}事^じですか？」

「かわいい顔^{かほ}して皮^{かわ}肉^{にく}が利^きくじゃん。まあ、こっちがお願いする立^{たち}場^ばだから下^{した}手^てに出^でるさ。おまえが讀^よんでる文^{ぶん}献^{けん}、読^よみ終^はわつたら俺^{おれ}に知^しらせてくれよ」
一^い体^{たい}ど^どの辺^{あた}りが下^{した}手^てに出^でたつもりなのかは判^はらなかつたけれど、目^め的^{てき}の方^はは理^り解^{かい}できた。

「それは構^{かま}いませんけど……これ、文^{ぶん}献^{けん}としてはかなり古^{ふる}いものですよ？ まだ魔^ま術^{じゆつ}と神^{しん}聖^{せい}術^{じゆつ}の区^く別^{べつ}もなかつた時^{とき}代^{だい}の、魔^ま法^{ぽう}使^しいの手^て記^きです」

だから現^{げん}在^{ざい}主^{しゆ}流^{りゆう}になつてい^いる魔^ま法^{ぽう}学^{がく}とは反^そり^りの合^あわ^わない供^く述^{じゆつ}が多^{おほ}々^々見^みられ^らるし、呪^{のろ}文^{ぶん}の必^{ひつ}要^{よう}性^{せい}につ^ついてろくに書^かかれてい^いない。講^{かう}義^ぎの復^{ふく}習^{しゆ}には全^{ぜん}く使^しえな^ないよ^うな代^{だい}物^{ぶつ}だつた。

「知^しつてるよ。今^{いま}時^{とき}の魔^ま法^{ぽう}使^しいにはあんまり役^{やく}に立^たたない魔^ま法^{ぽう}の使^しい方^{はう}につ^ついて書^かかれてるんだろ？」

「ええ、まあ」

「その方^{あなた}が俺^{おれ}には良^よいんだ」

少し神経質そうに唇の端を曲げ、英雄の息子はヨルクの対面に腰を下ろした。

「こないだの講義で習った話、覚えてるか？　なんで魔法を使うのに呪文を唱えるのか。魔術だろうが神聖術だろうが、今の魔法学では呪文を唱えるのが当たり前になってる」

「靈子^{ラルバ}に干渉するため、です」

魔法という現象は靈子の制御によって引き起こされる。靈子は人間の『精神の働き』に引張られる性質を持つ。例えば『炎の魔法』を使いたいのなら術者は『炎の魔法を使う精神状態』になる必要がある。これが現代における魔法学の常識だ。

靈子の制御——つまり、精神の制御。

「そう、『特定の精神状態』に移行するために呪文を唱える。高度な魔法になればなるほど、高度な精神集中が必要で、だから呪文も複雑になる」

「『呪文を唱える』という行為が即ち『精神集中』である——でしたっけ」

「特殊な韻^{いん}だの意味だのを含んだ言葉は、術者を特定の精神状態に没入^{ぼつにゅう}させるって話だけ」

そこまで言って、英雄の息子はうんざりしたふうに、あるいは自嘲するように両手を広げた。

「——向いてねえんだよ。呪文を唱えて魔法を使うなんて、全然できる気がしない。だいたい神聖術の呪文なんてほとんど祈り文句^{のりこ}だろ。祝詞^{のりと}だぜ、祝詞。それでどうやって集中しろってんだよ」

「……それは、魔法が使えないという意味では？」
「だから参考にしたんだよ。その文献書いた魔法使い、呪文なんてろくに使わなかったんだろ？」

「ええ、まあ」

「おまえがなんだってそんな本を読んでは知らないけど、空いたら知らせてくれよ」

どうして——その理由は簡単だった。

ヨルクはサーデインに入学してから、徐々に神聖術が使えなくなっていたのだ。

1

ヨルク・メルカが初めて魔法を使ったのは、ずっと小さな子供の頃で、ヨルク自身は当時のことをほとんど覚えていない。

そのときのことを考えると、ヨルクは養父から聞いた話を思い出すことになる。だからそのときの自分が何を考え、感じていたのかは、判らない。

養父は神官で、ジタリウという田舎の村に教会を構えていた。これは今も変わっていない。

スヴェリア王国における神官職は準公務だ。神聖術を扱える者が国からの援助を受けて村落や町に教会を構え、住民たちへ癒^{いや}しの魔法を使う。

その日、養父はジタリウからやや離れた別の村へ向かい、用事を済ませて村へ戻る途中だった。都市部からはかなり離れた田舎で、当時は戦後の不安定さも手伝ってかなり治安が悪かったという。他国か

ら流れてきた傭兵団^{ようへい}が山賊^{さんぞく}の真似事をする、なんてことも珍しくなかったそうだ。

ヨルクは山賊に襲われた一家の子供だった——らしい。推測でしか語れないのは、襲われた一家の間はヨルク以外誰も生きてはおらず、襲った側の山賊は魔法攻撃を受けて死んでいたからだ。

加害者と被害者の死体の山で、まだ言葉も喋^{しゃべ}れないような子供が母親らしき死体に向けて『治癒^{ちゆ}』の魔法を掛けていたという。もちろん死体を生き返らせるような魔法など存在しないし、『治癒』の魔法で助けられるような怪我でもなかったはずだ。

けれどそんなこと、子供に判ろうはずもない。

その子供は、ただ祈っていただけ——その祈りが霊子^{ラルバ}に干渉して、死体に癒しの魔法を届けていた。

淡い光が、子供と死体を包んでいたそうだ。

霊子が魔法に変わる際、魔法に成りきれなかった分の霊子が光になる。それは小さな子供の、ただひたすら純粋な祈りの魔法だった。



じん かい な
燼灰を薙ぐおろか者 災獣たちの楽土
尾白末果 イラスト／深遊

「なあおい、見てみる。こんな場所にあれだけの
偉方を引きずり出すとは、歴史的なことだぞ」

隣にうつそりと立つ男に小声で呟くと、俺は大き
く息を吸い込んだ。

時折硫黄の匂いが混じるが、いつもより空気は澄
んでいる。空は火山灰に覆われて暗く雲が垂れ込め
ているが、砦山脈ではいつものことだ。

大地に広がる灰色の粗い火山礫。

周囲に聳える冷えて固まった黒々とした溶岩の山。
雲と灰で頂上が見えない黒い斜面を背に負って、
五十人ばかりの人間がこちらを注視していた。

ほとんどの鎧を身につけた兵士たちだが、中央に
は官服に身を包んだひと握りの男たちがいかめしい
顔で並んでいる。

二人の宰相、文官長、武官長、その補佐役たち。
その端に立つて緊張を滲ませながらも周囲に目を配

っているほつそりとした老人は、議長の斗具留だ。
本来ならこの中央に立つべき国主の姿はないし、
国主が特に気に入っている残りの二人の宰相の姿も
ない。

だが、それでもこれだけのお歴々が中央府から遠
く離れたこの地に足を運ぶなど、雍古の歴史上初め
てのことだろう。

目が合うと、斗具留は重々しく大きくうなずいた。
それを受けて、俺はぱりつと糊の利いた官服の襟を
正し、気取った仕草で頭を下げた。

「本日は、遠路はるばるお越し頂き誠にありがとう
ございます。私、この計画の実行責任者を務めさせ
ていただく阿麻名と申します。それでは、要となる
男をご紹介します」

自分でも惚れ惚れするような良い声だ。男前で声
が洪くて仕事もできることに満足しながら、背後に
立つ大男を振り返る。

「この者が、我が国復興の鍵を握る依守也ござい

ます。かつて議会にて筆役ふでやくを務めさせていただいて
おりました。では本人よりひと言挨拶あいさつを」

さあ、と依守也を促した。

が、返事がない。

しんと居心地の悪い沈黙が落ちる。

「おい、何をしている？」

肘ひじで乱暴につつくと、依守也は無駄に大きな体を
しょんぼりと丸め、捨てられた犬のような目でこちらを見た。

「……嫌です」

「あ？」

この男は今なんと言った？

「流火るかさんが来てないなら何もしません」

るかさん……？ 人々の間にざわめきが走る。俺

は慌わてて依守也の腕を掴つかみ、お偉いさんたちに背を

向けた。

「確か段取りは教えたよな？ これまでお膳立てするの
にどれだけ苦労させられたか、わかってるのか、

おいっ」

小声で叱しかりつけて、チラと背後の様子を窺うかがう。こ
ちらを見る彼らの目に、ありありと猜疑さいぎの色が見て
取れた。

そりや当然だよな、と思うと肩が落ちた。

この、図体がでかいだけの情けない馬鹿ばかが、「人
外の力を得た不死身の男」で、「その力を使って
災獣さいじゅうに喧嘩けんかを売ることができるといふ話を、
誰だが信じるだろう。

俺だって、この馬鹿とひと欠片かけらほどのつながりも
なければ決して信じたりはしなかった。

赤の他人であつたならこんな苦労はしなくてよい
のに、と俺は思わず溜息をついた。

俺、家族を中央政府に呼ぶんです。

そう言って、大きな体を丸めて笑っていた姿を今
でも覚えている。

依守也が部下になつたばかりの頃のことだ。

無駄にでかい上に動きが鈍くてとにかく邪魔。

依守也に最初に抱いた印象はそれで、今でもさほど変わっていない。

政府の役人、といつても自分たち筆役は議会の記録を残すためのただの道具にすぎない。何かを発言する機会はないし、下手に口を出せば首が飛ぶ。

ただ黙々と議事録をつけ、清書し、提出する。後は書類の保管と管理。ある程度の能力さえあれば誰がやっても差違はないし、代わりなどいくらでもある。その程度の役職なのだ。

だから、議会場においての筆役の席はとんでもなく狭い。記録漏れがないように二人ひと組で議事録を取るのだが、ちよつと腕を動かすだけで隣と肘がぶつかり、筆先が乱れる。普通の体型の者でも体を縮めて作業しなければならず、慢性的な肩凝りや腰痛が悩みの種だ。

そんな環境で、馬鹿でかい依守也は本当に邪魔だ

った。なんでこんな奴がよりにもよつて筆役にまわされてきたんだ、と怒りを覚えるくらいに。

できれば一緒に組みたくはなかったが、新入りの面倒を見るのは主任である自分の役目だった。

はやつとしたしまりのない顔の割に、あいつは仕事の飲み込みは早かった。だが、とにかく失敗が多すぎた。

しょつちゅう書き損じをして、そのたびに「ひゃあ」とか「うきやあ」と叫び声を上げる。そのことに動揺して墨壺すみつばをひっくり返し、大騒ぎになつて議会を中断させる。

いつそ議長が出入り禁止を言い渡してくれば首にできるんだけどな、と思つたがその場合直属の上司である自分の責任も問われるため、野放しにはできなかった。あれの顔を見る度に小言を言うのが日課になつていた。

ある時、あの馬鹿はよりにもよつて斗具留議長が欠席されたその年の予算を決める会議の最中に、盛



曙光の円舞曲 ヴィレンドルフ恋異聞

夏目翠 イラスト／坏よしや



かつて女神は八粒の涙を流した。
それは八つの島となった。女神の流した涙の島々
という名の――

1

ヴィレンドルフの八つの島は、神話に基づいてそれぞれ違った意味を持ち、運命が定められている。
「知恵」の涙により生まれた一番目の涙の島は文明の黎明地と呼ばれ、また「悪意」の涙により生まれた七番目の涙の島が他の島々を脅かすというように、八番目の涙の島が意味するところは「混沌」。そのせいか、かの島は未だかつて一つにまとまったことはない。現在も食のアスラム、武のランドール、鉄のゴートリアの三国に分かれている。これらをまとめるために、〈水の司〉と呼ばれる、女神の御使いがいた。

現在の〈水の司〉には史上初めて女性選ばれた。

名前は市原未緒。黒眼黒髪の典型的な日本人だ。何の因果か、あるとき、異世界のヴィレンドルフへとやってきた。

「はあ……」

これで何度目の溜め息だろう。未緒は今、普段生活をしている神殿とは違い、柱の一本でさえ装飾を施された壮麗な部屋にいた。

それというのも今日は、島の北西部を占めエイリーズの軍事の要を担うランドールを訪れていたからだ。目的は、宿敵であるセブリーズとの決戦に向けた晩餐会への出席だ。

未緒はきれいに結い上げられた髪を崩さないように、机に額を押しつけた。

「うう……どうしよう」

「どうした？ 気分でも悪いのか」

うつぶしていた頭を軽く小突かれ、未緒は顔を上げる。傍らには、珍しい藍色の髪と瞳を持った端正な顔立ちの青年が立っていた。

「エアリス」

心配そうな顔の主はもともと、南部にある農業大国アスラムの宰相補佐官をしていたのだが、今は未緒——《水の司》の参謀となっている。

「熱でもあるのか」

白く長い指が未緒の前髪を掻き分け、額が合わせられる。整った顔が目の前に迫った瞬間、心臓が大きく打った。

「な、何でも無いっ。ちよつと緊張しているだけ……その、挨拶があるから」

赤くなつた頬を見られまいと、うつむいて腕を突き出してみたものの、エアリスは離してくれなかった。逆に、腕の中に閉じ込められる。

「大丈夫だ。おまえならできる」

「うん……」

耳元で低く囁かれ、不思議な安堵感に包まれる。

顔を上げると、息がかかるほど間近に、エアリスの唇が——

「お取り込み中のところを申し訳ありませんが、お客さまですよ」

軽く扉を叩く音がして振り返ると、焦茶色の髪と瞳を持つ背の高い男性、エアリスの従者兼護衛のセドリクが立っていた。

呆れたような視線に、未緒ははつと我に返る。即座に離れたものの、顔が火照っていた。

「誰だ？」

一方、エアリスときたら、何事もなかったかのように表情も声も落ち着いて、セドリクに應對しているではないか。

「実は——」

（うう……恥ずかしい……）

赤くなつたであろう顔を冷まそうと、頬をぺちぺちと叩くのには必死で、セドリクの説明を聞いていなかった。

「《水の司》？」

「は、はいっ」

慌てて返事をすれば、いつのまにかそこには見知った二人が立っていた。

「ごきげんよう、ミオ」

「ティア！」

豪華な金髪を高く結い上げた、美しい水色の瞳の持ち主はティアマツトという。このランドールの公女で、未緒の友人でもあった。

「お邪魔だったら、ごめんなさいね」

「ううん。会えて嬉しい」

ティアに駆け寄ろうとして、隣の大きな影に気づいた。

「邪魔だということは否定しないのか」

「しよ、將軍!!」

からかうような言葉の主はランドールの大將軍で、ティアの婚約者でもあるザカリード・ケアンズだった。赤毛の偉丈夫で、数多くの女性の心を虜にしていた女たらしでもある。

「そ……そういうわけじゃなくて、だから」

しどろもどろになる未緒を見て、ザカリードは吹き出した。三十間近の強面にもかかわらず、無邪気な笑顔はまるで少年のようだ。

「ザック、ミオをからかうものじゃありませんわ」

「悪かったな」

ティアに叱られても、ザカリードは悪びれもしない。

「久しぶりだな、〈水の司〉……いや、ミオ。それにエアリスも、随分と仲良くやっているようだな」

「ご無沙汰しております」

動揺する未緒とは対照的に、エアリスは平然と受け流している。

涼しげな表情が憎らしいとにらんでも、エアリスはどこ吹く風だ。

「まったく……からかい甲斐のない奴だな」

「ありがとうございます」

互いに不遜な笑みを浮かべて言葉を交わす二人をよそに、未緒は溜め息を吐いた。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。